

かがやき

暫定的補足表題「ウオラントス」

ラテン語でボランティアの意

No.59(2021.10.15 刊行)、広報委員会編集

県立図書館発行

禁複製転載©広報委員会

特集 理想的ボランティア活動

水戸キリストの教会での ボランティア活動とコロナウイルス対応

水戸キリストの教会執事兼代表役員

鈴木博之

はじめに

私は、以前、茨城県立図書館ボランティア通信紙「かがやき」No.34(2017.4.5 刊行)に、水戸キリストの教会におけるボランティア活動を中心とした依頼原稿を提出したが、その後、約4年半が経過しており、昨今のコロナ禍への対応も含めて、改めて水戸キリストの教会を中心とした活動について、概要をご紹介します。

なお、教会の活動は、まったく収益を目的としておらず、教会員の自主的な献金(捧げ物とも表現される)で、すべて賄っており、地域の人々や外国の人々に対する

精神的なサポートや道徳的な向上、福祉なども目的の一環として行っているため、広い意味では、ボランティア活動の範疇として考えても差し支えないと思われる。

最近の主なボランティア活動内容

水戸キリストの教会は、まず典型的なボランティア活動のひとつとして、9年以上前からカンボジアの学校に行けない貧しい少年少女たちのために、現地で英語教育などを中心とする特別な学校である BCS (Beatitude Cambodia School、ここで Beatitude は至福／八福の教え [イエス・キリストが山上の垂訓の中で真の幸福とは何かを語ったもの]。但し、数年前までは Banyan Community School と名付けられ、ここで Banyan はガジュマル等、イチジク属の樹木を表わす) をシンガポールの一つの教会と共同で立ち上げて学費無償で運営しており、年に数回 Love & Serve ミッションチームの派遣(これは、現地生徒の教育およびミッションチームメンバーの体験的教育も兼ねている)や運営資金の全額寄付などを実施して来ているが、コロナ禍のため昨年からはミッションチームを派遣できなくなったため、水戸教会員の献金を随時集め、教員の給与他の運営資金として現地に送金する事が現在の活動の中心になっている。なお、現地での物価高騰の影響によって必要な運営資金が年々増加しており、なかなか厳しい情勢に置かれているものの、何とか頑張っている状況にある。



Love & Serve チーム及び BCS のスタッフ



アガペー・ミニストリーのスタッフ及び受給者の一部(1)



カンボジア BCS の子供たち



アガペー・ミニストリーのスタッフ及び受給者の一部(2)



Love & Serve ミッションチームと BCS の生徒達



アガペー・ミニストリーでの配給活動の一コマ

もう一つ典型的なものとしては、ホームレスの方々の支援活動（教会では「アガペー・ミニストリー」と呼んでおり、アガペーとは、キリスト教における神学概念で、無償の愛を表わす）であり、これは水戸キリストの教会において、1990年代から当時のマーク・ハンコック宣教師を中心に始められ、その後、近隣の少数の教会も加わ

って、毎月1回、継続されてきているもので、教会員からの寄付に加えて、7年くらい前からNPO法人「フードバンク茨城」等から、相当な量の食料品等を寄付して頂いている。食料、衣料等の配布は勿論、必要な場合には生活保護受給の為の手助

どを行なうこともある。

なお、コロナ禍が蔓延してきた事などが契機となって、昨年の10月からは、社会福祉法人「ナザレ園」と緊密な関係があり、福祉に対する経験・造詣の非常に深い瓜連キリストの教会に開催主体教会になって頂くと同時に、ホームレス支援全国ネットワークにも加入して、茨城県内外のどこからでもインターネットで検索すると支援を求めることが出来、また、支援したい方々は瓜連キリストの教会あてに食品などを送ることが可能な体制を作った。実際に送って下さる支援者もいる。そして、水戸キリストの教会、カトリック水戸教会、NPO法人「アガッペひたち」等の有志メンバーが一致協力して、毎月1回、場所は従来通り水戸キリストの教会において行うようになっている。

礼拝等におけるコロナ禍対応

水戸キリストの教会では、コロナウイルス感染予防対策として、2020年3月22日から2021年7月4日まで約1年3ヵ月の間、教会堂でのライブ礼拝は実施せず、専任スタッフが色々とアレンジして、事前に録画したYouTubeでの動画配信によるオンライン礼拝を行なって来た。(但し専任スタッフや人数制限付きの希望者は教会堂でのYouTube動画を使用した礼拝も並行して実施。)

このYouTube用の動画編集・作成は、各週の聖書朗読、聖餐式(カトリックではミサに相当)と献金の司式、祈禱、讃美歌等の複数の当番教会員にそれぞれ音声収録(日本語と、外国人には英語)を依頼して

個別に収集し、それを礼拝説教や証し等と共に、専任スタッフが作成した文字付きのスライドやビデオ等と同期させ画像・音声の編集を行うもので、かなり事前準備に時間と手間がかかるため、礼拝参加・視聴用のURLを水戸教会関係者にEメールで送付するのは土曜日の深夜か日曜日の朝となり、毎日曜日の午前10時になって、そのURLをクリックすると2分間のカウントダウンが始まり、自動的に礼拝ライブ配信がスタートする(その後は、送付された礼拝用のURLを随時クリックするか、教会のホームページから、何時でも視聴できる)。

2021年7月11日時点では、感染者が減った時期に当たったため教会堂でのライブ礼拝を再開したが、感染リスクを考慮してYouTubeでの動画配信も並行して行なうこととした。但し、この場合はYouTubeでの同時配信が難しいため、礼拝の動画を編集後にYouTubeおよび教会HPにアップロードする方式にした。このやり方は現在まで継続中である。

オリンピックとパラリンピックでのボランティアについて

今回の東京オリンピックで、男子110mハードルに出場し、最終的に金メダルを獲得したジャマイカのハンスル・パーチメント選手が、試合前に到着した会場が間違っており、現地で慌てていた時に、その違う会場にいたボランティアの一人の女性が、急ぎのタクシー代として1万円を手渡し、正しい競技場を教えて窮地を救い、そのおかげもあって、パーチメント選手が優勝で

き、競技後にそのボランティアの女性にお礼に訪れて金メダルを見せ、勿論、返金もしたという美談が報道された。

この話に例示されるように、自分の事よりも他の人々の為になることを喜んで実行しようとする精神には感銘を受ける。オリンピックとパラリンピックで働いたボランティアの方々は、大部分が基本的にこのような考え方に基づいて、ある種の自己犠牲を伴いながら奉仕されたと思う。キリスト教においても、自己犠牲が非常に大切であり、しかも、それを喜んで行うべきことが土台として教えられているため、キリスト教とボランティア精神とは密接不可分と言えるものと考えている。

日本の教会ボランティアについて

宗教研究者 桜井 淳

私が修行している寺にはボランティアは存在しない。寺は、株式会社組織になっており、寺関係者には、月給が支払われる。寺の主な収入源は、檀家料、布施、塔婆書き料、読経、葬儀、その他からなる。檀家数が、300戸以下ならば、住職は兼職しなければならず、500戸ならば経済的に成立し、1000戸ならば、余裕を有する。しかし、今の日本では、300戸以下の寺が、全体の八割を占めており、さらに、人口減に伴う墓の閉鎖などにより、減少傾向にあり、深刻な社会問題になっている。

いっぽう、日本の大部分のキリスト教会(カトリック系とプロテスタント系)は、少数の専任スタッフと数名のボランティアか

らなり、ボランティアの役割が大きい。キリスト教信者数は、欧米では、宗教信者数の70%にも達するものの、日本では、2%弱に過ぎない。教会の主な収入源は、政府の政教分離政策のため、独立採算制になっており、信者からの献金、寄付、教会によっては、幼稚園や駐車場の経営利益からなる。寺と同様、経営状態は、信者数に拠る。私の7年間の調査に拠れば、水戸キリストの教会は、地方の教会としては、施設が整っており、質の高い信者数が多く(日本の英語教育で制度化されたAET制に基づく米国英語教師が多い)、専任スタッフもボランティアも優秀であり、経営的にも、安定していると思われる。

水戸キリストの教会の専任スタッフもボランティアも信者も、すべて、献身的であり、高齢社会であるにもかかわらず、年齢構成が良く、子供や若い女性も多く、活気にあふれている。子供対象の空手キッズクラブやイングリッシュバイブルクラブも設けられており、常に、将来の人材確保に備えている。以上のようなことは、教会の運営が、的確で、理想的な証である。

編集後記

通信紙の表題は、No.2(2003)から、公募により決められた「かがやき」になりましたが、表題の根拠は、当時のボランティアの一人の女子高校生が、周囲を見て、「ボランティア全員が輝いていたため」と言うことでした。すでに、お気づきのことと思いますが、No.58(2021)から、暫定的補足表題として、「ウオランタス」(ラテン語で「ボランティア」の意)を挿入してあります。広報委員会は、将来的に、ボランティア全員の意見を集約した上で、表題を「ウオランタス」に変更したいと考えています。

今回は、ずっと持ち続けてきた大きなテーマを掲げ、「特集 理想的なボランティア活動」として、定点観測(水戸キリストの教会、水戸芸術館、茨城県近代美術館、通信紙 No. 51 参照)のひとつの身近な水戸キリストの教会(米国のプロテスタントの Church of Christ の系列)のボランティア活動を紹介しました。

いくら、私が、曹洞宗に出家した雲水とは言え、さらに、「比較宗教学」や「宗教社会学」を研究している宗教研究者とは言え、特定の宗教宗派の活動内容に触れるのは、ルール違反になりますので、最初からそのようなことを意図するつもりはなく、所属組織に関係なく、身近で、優れたボランティア活動を実施している人達の様子を紹介することにより、「理想的なボランティア活動」として、各自の心のよりどころとしていただきたいと期待しています。鈴木博之氏には、通信紙 No.34(2017)におい

て、「39年間のボランティア体験」と題する質の高い内容のボランティア体験をまとめていただきました。今回はその実績を踏まえ、コロナ禍において、さらなる到達点の紹介をお願いしました。

私がボランティアにかかわる定点観測を開始した動機は、最も建設的であり、将来性が感じられ、明るく、楽しく、参加者の年齢構成に偏りがなく、ボランティア相互の信頼が強いのは、身近な組織で、どこかと言うことでした。さらに、どのような人達からなるボランティアであり、どのような考え方と作業分担を経て、何を作り上げているのか、ボランティアの本質的で理想的な在り方を見出したかったのです。

水戸キリストの教会は、牧師(pastor, カトリックでは神父)、宣教師(missionary, 外国人の伝道者)、牧師見習い、事務補助員が、専任スタッフで、執事(deacons)などは、ボランティアであり、ボランティアが経理から全体的な運営の一端まで担当し、質の高い教会機能の一端を担っています。教会 HP の作成・更新などは、すべて教会の人達の手で行っています。

水戸キリストの教会は、コロナ対策として、リモート日曜礼拝を実施しており、一時間半の礼拝の内容は、専任スタッフが中心となり、ボランティアの協力を得ながら編集後、web に upload しています。映像は、きれいで、編集技術も高く、良い出来栄です。説教は、日本語で、つぎに英語で、そのくり返しであり、説教の内容と語り方がうまく、明るく、躍動感があり、分かりやすい表現です。ボランティアには、求心力があり、よく機能しています。

桜井 淳